

## 85 誌上発表 西鶴作品にみる身体に関する語(四)

計良 吉則

赤城少年院 医務課診療所

大本六巻六冊、全二十七章で構成される『武家義理物語』は貞享五（一六八八）年に刊行された。本作品はその序文にもあるように、「義理」に信念を貫き身を捧げる武士の世界を描いている。西鶴はそんな武士の心意気や行為を非難するのではなく、むしろ好意的に記述しており、その根底には当時の形骸化しつつある武士道に対する批判が込められている。

本作品の中の身体に関する語に着目し、それについて調査することは、当時の人びとの身体観を知るうえで意味のあることと考える。

まず、全身を表すものの中では「身」という語が圧倒的に多く、122か所みられた。「身を隠し」「女の身にしては」「是非もなき我が身」「随分をさめたる身」「この身もここに果てなん」のように用いられている。また「肌」は3か所あり、「諸肌脱ぎて」のように用いられている。

頭部においては「面」は9か所で、「互ひに面を見合はせし時」「面をあはさせ」のように用いられている。「首」は8か所で、「さてはこの首によしみあり」「死に首ながら」のように用いられている。

躯幹では「腹」は10か所で、「腹かき切り」「追腹の覚悟して」のように用いられている。また「腰」は9か所で、「腰を撫でけるに」「腰より長緒の付きし瓢箪を取り出し」のように用いられている。

四肢の中では「手・指」が多く、38か所みられた。「毛の生えたる手」「手ばしかく刀抜き合はせて」「皆指を差し」のように用いられている。また「足・脚」は7か所で、「いまだ足も立ちける」「足も立つ程になりぬ」のように用いられている。

五孔では「目・眼」が最も多く、22か所みられた。「目に見ぬ助太刀」「目を見開き」「眼前に見ながら」のように用いられている。次に「口」が10か所と多く、「一口に、かみ殺されたし」「口を閉ち」のように用いられ、「耳」「鼻」は「耳かしましく」「鼻紙食ひ裂きて」のように用いられている。

分泌物等では「涙・泪」が多く、17か所みられ、「涙をこぼし」「涙に袖を浸しぬ」のように用いられ、「血」は5か所あり、「血潮を自らぬぐひ」のように用いられている。また「息」が17か所と多く、「息も絶々の時に至りて」「息をつぎて」のように用いられていた。

ところで、『武家義理物語』の中に「鹿の袋角」が複数記述されている。一つは巻二第三章「松風ばかりや残るらん脇差」の中で、思いを遂げぬまま殺された女の怨念により、「いづれの女郎にも、額に鹿の袋角のやうなる物生ひ出で、美形をかしげになりて」とある。さらに一つは巻六第三章「後にぞ知る恋の闇討」の中で、落馬して負傷した者に対して、「この打ち身には、鹿の袋角を紺屋の糊にて摺り混せて付くと、そのまま痛み去るもの」とある。雄鹿の角は生え始めは皮をかぶったコブのような形をしており、中には血液等が充満している。このエキスを生薬にしたものは「鹿茸（ろくじょう）」として知られ、漢方では三大妙薬の一つとして貴重であり、その効能は疲労回復や精力増強等である。前記二つの記述から、当時「鹿の袋角」は何やら得体の知れぬ、しかし不思議な効力をもつものとして認識されていたのかも知れない。現代（西洋）医学においては、「鹿の袋角」の血液中にはインスリン様成長因子（IGF-1）が含まれていて、損傷した軟骨や腱の修復に効果があると指摘する整形外科医もいる。また漢方に関連して、巻四第一章「なるほど軽い縁組」の中で、親の敵を討とうと勇んで出発する際、「口に人参をかませ」との記述がある。「人参」は乾燥した朝鮮人参であり、文脈から精力をつけるための行為ととれる。朝鮮人参にはジンセノサイドとよばれるサポニン配糖体が含まれ、糖尿病、動脈硬化、滋養強壮などに効果があるとされる。